

プロヴァンスの贈りもの

2007(平成19)年6月11日鑑賞(試写会・リサイタルホール)

★★★★



監督＝リドリー・スコット／原作＝ピーター・マイル／出演＝ラッセル・クロウ／アルバート・フィニー／マリオン・コティヤール／フレディ・ハイモア／アビー・コーニッシュ／トム・ホランダー／ディディエ・ブルドン／イザベル・カンディエ／ヴァレリア・ブルーニ＝テデスキ（角川映画配給／2006年アメリカ映画／118分）

……薫りたつような南仏プロヴァンスのブドウ畑を舞台として展開される叙情溢れる英仏対決(?)は、面白い人間ドラマに……。一直線に駆け抜ける人生もいいが、ちょっとした休暇があなたの運命を大きく変えることも……。仕事かそれとも幸せかを大きなテーマとしながら、恋模様をうまく絡め、人生とは？ 幸せとは？ を考えさせてくれる秀作をじっくり楽しみたいもの。ところで、ウソも方便なら、偽造も方便……？

第4章



エピックから一転して……？

リドリー・スコット監督は1937年イギリス生まれの巨匠で、『ブレードランナー』（82年）、『テルマ&ルイズ』（91年）、『ハンニバル』（01年）等々有名。近時はラッセル・クロウの主演男優賞などアカデミー賞5部門を受賞した『グラディエーター』（00年）、『キングダム・オブ・ヘブン』（05年）などのエピック（史劇）ものが目立っていたが、本作は一転して南仏プロヴァンスを舞台に叙情的な大人のストーリーを……。

人間、70歳を迎えようとする年になれば、人生をいろいろと振り返るとともに、他の人に対してもどのように生きるのが最も自然で人間的な生き方なのかを示したくなるもの……。ひょっとして、リドリー・スコット監督もそんな心境で、エピックものから一転してこの映画を……？

味わい深さはワイン以上？

🎬原作は……？

リドリー・スコット監督がこの映画をつくったのは、多分全世界で500万部を売り上げるベストセラーとなった『南仏プロヴァンスの12ヶ月』（90年）をはじめとして、プロヴァンスの薫りタップリの本を次々と出版しているピーター・メイルの原作に惹かれたため。ピーター・メイルは1939年イギリス生まれだから、リドリー・スコット監督と同世代だが、1988年つまり50歳を迎える直前に、妻と犬と共にプロヴァンスに移住したとのこと。それはきっと、プロヴァンスの魅力に参ってしまったため……。

私はもちろんそんな原作を読んでいないが、南仏プロヴァンスというだけで、美しい自然や美しいブドウ畑が連想されてくるというもの。もっとも、美しい自然もいいが、映画が面白いのはそこに面白い人間ドラマや恋愛劇が展開されるため。さてこの映画では、南仏プロヴァンスを舞台に、ワインをめぐる(?)どんな人間ドラマと恋愛劇が展開されるのだろうか……？

🎬プロヴァンス vs. カリフォルニア

この映画は、イギリス人監督リドリー・スコットが、イギリス人作家ピーター・メイルの原作を基に、南仏プロヴァンスのすばらしさとそのブドウ畑を舞台とした人間模様を描いたもの。したがって、ヨーロッパ映画の雰囲気になるのは当然で、アメリカのハリウッド映画とは異質なもの。つまり、ワインの薫り豊かな映画をつくるにはフランスでなければ、というのがこの映画の前提……？

その前提にケチをつけるつもりは毛頭ないが、私がこの映画を観て思い出した映画は、『サイドウェイ』（04年）。これは、中年男2人が「人生とワインの共通点は？」などというしゃれたテーマで、カリフォルニアの^{ワイナリー}葡萄酒醸造所へのワイン旅行を描いたもので、地味な作品ながら、第77回アカデミー賞の作品賞・監督賞のみならず、助演男優賞・助演女優賞にそろってノミネートされた秀作（『シネマルーム7』212頁参照）。

もっとも、私がこの『サイドウェイ』をよく覚えていたのは、試写会終了後ワインサービスがあり、自由にカリフォルニアワインを試飲することができたため……。2杯、3杯とたて続けに飲んだワインが上々だったことは言うまでもない……。さらに

大きなお世話かもしれないが、ワインは決してフランス産、プロヴァンス産ばかりではなく、カリフォルニア産もあること、さらに日本にも長野県の信濃ワインをはじめ、山梨県、山形県、北海道産などがたくさんあることをお忘れなく……。

ヘンリーおじさんはピーター・メイル自身……？

この映画の主演は、今はロンドンの金融界で“豪腕トレーダー”と恐れられているマックス・スキナーを演ずるラッセル・クロウだが、全編を通じてマックスの少年時代（フレディ・ハイモア）との対比が大きなポイントになる。

イギリスを愛しながら南仏に移り住み、広大なブドウ畑を所有して趣味の世界に生きるヘンリーおじさん（アルバート・フィニー）と共に、マックスは少年時代を過ごしていたから、大きくヘンリーおじさんの薫陶を受けたのは当然。妻も子供もいない人生は寂しいのではと思うが、彼はそんなことは意に介さず、常に堂々と生きているから、その姿は実に魅力的。

彼がマックス少年に教えたのは、ワインづくりの哲学だけではなく、スーツに関しては、大切なのはそれをつくる仕立屋であることなど多岐にわたっている。そして、「負けを認めるのが男だ。相手の勝利を祝う、広い心を持て。勝利から学ぶものは何もない。だが敗北は知恵を生み出す。もちろん勝つ方が楽しいに決まっているが、負けることだってある。大事なものは、負け続けないことだ」という「勝利と敗北」の哲学や、「コメディで一番大事なものは何か？ コメディで大事なものは……タイミングだ」という奥深いもの。今、マックスがトレーダーとして辣腕をふるい大成功しているのは、多分この「タイミング」のおかげ……。

こんな理想的な趣味人のヘンリーおじさんは、奥さんがいないことを除けば、多分ピーター・メイル自身……？

豪腕トレーダーの考えることは……？

ヘンリーおじさんの薫陶を受けてプロヴァンスとワインの薫りでいっぱいだったマックス少年も、日夜激烈な競争にさらされるロンドンの金融界で生き馬の目を抜くような生き方を続けてきた結果、今や“豪腕トレーダー”と呼ばれ、ある意味カッコいい地位についていたが、こんなものはいつひっくり返るかわからない不安定なもの……？ マックスは利口だからそれを十分承知していたから土日・祝日も休まず、そ

の座を狙うライバルたちを寄せつけない日々が続いていた。

そんなある日、ある相場で大成功を取めたマックスのもとに、秘書の口から飛び込んできたのはヘンリーの死亡。これによって、遺言書は残していないけれども、ヘンリーに最も近い血縁者であるマックスがプロヴァンスの土地をはじめとする遺産すべてを相続することに……。

今、マックスはたんまり儲けているからカネには全然困っていないものの、いくらあっても邪魔にならないのがおカネ。そのことを誰よりよく知っているマックスは直ちにプロヴァンスに飛んで、相続のため女性公証人ナタリー・オーゼ（ヴァレリア・ブルーニ＝テデスキ）との面会などの手続を済ませたうえ、親友で不動産業者のチャーリー・ウィリス（トム・ホランダー）の協力を得て、プロヴァンスの土地をすべて売却しようとしたが……。

カネが愛着か……？

プロヴァンス行きは必要最小限のことを処理するためだけ……。それがマックスの考えだったが、あの演技派俳優ラッセル・クロウがプロヴァンスで見せる演技は、ユーモアいっぱいのもの……？

長年ヘンリーおじさんの下でブドウづくりの職人として働き、誰よりもこの土地とブドウ畑を愛しているフランシス・デュフロ（ディディエ・ブルドン）はマックスがブドウ畑を続けることを希望したが、マックスは即座にその申し入れを却下。以降、マックスとフランシスは奇妙な敵対関係に……？

マックスの大切な職場への復帰が遅れたのは、少年時代よく遊んでいた、今は水の入っていないプールの中に落ちてしまったため。こりゃどう考えてもハシゴか棒がなければ上に上がれないから、誰かの助けが必要だが……？

他方、マックスだって人の子。時々はふとヘンリーおじさんと過ごしたプロヴァンスでの少年時代を懐かしく思い出したのは当然。しかし、今は思い出や愛着よりはカネ。そう考えて、この土地をより高く売却するべく、建物の化粧直しやブドウ畑の鑑定評価を高めるための細工（？）などに精を出して頑張っていたが……。

ジャンヌ・ダルクの登場……？

この映画はプロヴァンスの薫りいっぱいの映画だが、後述のように、ある意味英仏

対決の映画……？ その第1は、イギリス人のマックスに対するフランス美女のジャンヌ・ダルクの登場……？ といっても、もちろん本物のジャンヌ・ダルクではなく、それはプロヴァンスで「ラ・ルネッサンス」という名前のレストランを営んでいる女性ファニー・シュナル（マリオン・コティヤール）。「ラ・ルネッサンス」とは「再生」という意味で、愛に傷ついたファニーが心を込めてつけた名前だ。

マックスとファニーの出会いは最悪。プロヴァンスに入ってもケイタイを片時も手離せないマックスは一瞬脇見運転を……。運悪く、自転車に乗ってマックスの車に対向して進んでいたのがファニー。ファニーは「危ない」と叫んで瞬時に車を避けたが、そのまま勢いあまって道端へ転落し、足からお尻にかけて大きなアザが……。他方、前方に目を戻したマックスは、そんな事故があったことすら知らないまま……。こりゃ、自転車の女性が怒るのは当然……。

そんなフランス人のジャンヌ・ダルクならぬプロヴァンスのファニーが文句を言うため、マックスの屋敷を訪れたのは、たまたまマックスが水の無いプールの中に落ち込んでいた時。「ハシゴを持ってきてくれ」と頼むマックスに対して、ファニーがとった行動は、何とプールの中に水を注ぎ込むという大胆なもの。プールが水でいっぱいになれば、マックスは当然プールから出ることができるが、こんな荒療治はちょっと無茶……。誰でもそう思うはずだが、さて当の本人たちは……？

相続争い勃発か……？

そんなこんなのマックスとファニーのバトル模様（？）と、それが恋模様へ発展していく予感を感じながら観ていたが、そこに突如降って湧いたのが、ヘンリーの娘と名乗るお嬢サン、クリスティ・ロバーツ（アビー・コーニッシュ）の登場。「すわ、相続争い勃発か！」と思ったのは私だけではなく、マックスもそうだったよう。

マックスは直ちに不動産の売却を相談していたチャーリーや公証人と連絡をとり、相続人対策を協議したが……？ どうしたらクリスティがヘンリーおじさんの子供だと証明できるの……？ その証明ができる前に、マックスが不動産を売却してしまったら、その売買契約の効力は……？

いろいろと法律上の論点はあるものの、当面はクリスティのご機嫌をとり、売却の話はしないまま、早期に売ってしまおうというのが、マックスとチャーリーの立てた基本戦略。しかし、これは弁護士としては絶対お薦めできない悪しき選択……。しか

し、さすが巨匠リドリー・スコット監督らしく、そんな相続をめぐる法律論点はサラリと紹介するだけにとどめ、様子見にやってきたチャーリーがクリスティと恋におちていく模様を描くなど、さすがプロヴァンスを舞台とした風情がタップリと……。

クリスティはカリフォルニアからやってきたアメリカ人

クリスティは、マックスに対してアメリカ人と名乗ったとおり、カリフォルニアの有名なワインの産地ナパ・バレーからやってきた女性。いつヘンリーおじさんがアメリカに……？ また、いつアメリカで女の子を……？ 誰でもそういう疑問をもつのが当然だから、マックスもその点を中心にやんわりと追及を開始……？

他方、ブドウづくり職人のフランシスは、クリスティの鼻の高さを見てヘンリーの娘に違いないと断言した。もっとも、フランシスは、ブドウ畑の売却を阻止するため、その鑑定評価を下げるべく鑑定人とつるんでいたようだから、どこまで彼の言葉を信用できるかは疑問……？ クリスティは「お父さんのブドウ畑を見たかっただけ……」と話していたが、果たしてそれは本当……？

「ウソも方便」なら、偽造も方便……？

刑法上の「偽造罪」とは文書の作成名義を偽ること。偽造で有名なのは、アラン・ドロンの主演『太陽がいっぱい』(60年)で、野望に燃えたハングリーな青年トムが金持ちのお坊っちゃんフィリップのサインをまねる練習をくり返すシーン。サイン社会のヨーロッパでは、パーフェクトな偽造のためにはこの技術が不可欠……？

ヘンリーおじさんからいろいろなことを教わっていたマックス少年は、おじさんの代わりにサインすることも教わっていたよう……？ すなわち、毎月のさまざまな支払用の小切手にヘンリーおじさんに代わってマックス少年がサインしていたから、書類の偽造はお手のもの……？ もちろん、偽造は刑法犯だから、絶対そんなことをしてはならないのは当然だが、ウソも方便というように偽造だって方便……？ つまり、悪い偽造と良い偽造があるということだ……？

さて、マックスがヘンリーおじさんのサインを偽造して行った、一世一代の策略とは……？



©2006 Twentieth Century Fox

仕事をとるか……？ 愛をとるか……？

この映画のテーマは途中からはっきりと見えてくる、すなわちそれは、人間、仕事をとるかそれとも幸せをとるかという大切なテーマ。マックスはトレーダーとしての仕事は大好きだが、ホントにそれで幸せ……？ とりわけ、プロヴァンスで好きな人ができたのに、プロヴァンスを捨ててロンドンに戻り、仕事に明け暮れながらおカネを稼ぐことが本当に好きなの……？

プロヴァンスへ来た時は、ホンの小旅行と思っていたマックスだったが、否応なく滞在が長くなり、ヘンリーおじさんと暮らした少年時代を思い出していく中、仕事をとるか、愛をとるかの二者択一に迷いはじめることに……。マックスの前に突如ジャンヌ・ダルクとして登場してきたファニーは、当初はやっかいな女だったが、今は心から愛する女性になってしまった。それは一体なぜ……？ そこには、少年時代のある思い出も……？

イギリス人マックスがここで仕事を捨てて、ファニーとの幸せを求めることになれば、英仏対決は完全にイギリスの敗北となるのだが……？

🎬 今日はどうなワインを……？

この映画の中では、当然ワインに関するさまざまうんちくが語られるが、正直言って私にはそれはほとんどわからないことばかり……。

私は数年前から「痛風」予防のため(?)、ビール党から焼酎党に変えたが、最近私の友人にはワイン党に変わった人も多い。その場合、そのほとんどは赤ワイン派に……。それは〇〇、△△という理由にもとづくものだが、この際その中身は省略……。私がワインを飲むのは、ワインの好きな人と2人で食事する時だけ。その場合はもちろん、フルボトル1本を2人で飲むのが適量だが、往々にしてそれを超えてしまうことも……。したがって、もし1人の時、自宅でワインのフルボトルを開けたら、ケチな私はきっと1本全部を飲んでしまうだろう。そう思っているため、自宅や事務所にワインはたまる一方……。

『サイドウェイ』を観た時と違って今回の試写会ではワインサービスがなかったから、この評論を書き終えた今日くらいは、赤ワインのボトルを1本開けて飲むことにしよう。さて、今日はどうなワインを……？

2007(平成19)年6月12日記

ミニコラム

日本にもミシュラン旋風が！

07年11月22日『ミシュランガイド』東京版が発売され、東京では一大旋風が巻き起こった。三つ星8店、二つ星25店、一つ星117店、計150店は都市別で世界最多。AP通信は「東京は美食の都の地位からパリを引きずり降ろした」、ロイター通信は「パリもニューヨークもローマも忘れてしまえ。グルメの本場は東京なのだ」と全世界に発信した。平和でノー天気なわが日本国

民は、難しい政治談義よりこの手の話題が大好きだから、週刊誌やグルメ雑誌を中心として、しばらくはその賛否や「なぜあの店が！」と口角泡を飛ばした議論が続くはず。また、来年の更新時期にも同じ議論が。しかし、世界には食料難で苦しむ人たちが多数いることもお忘れなく。

2007(平成19)年11月21日